

2022年2月27日

年間第8主日

菊地功大司教 メッセージ

シラ書は、箴言や知恵の書と並んで、人生の現実を冷徹に見据えた辛辣な言葉に満ちあふれています。その言葉は辛辣であると同時に、人生を豊かに生きる上での奥深い示唆にも満ちあふれた含蓄に富む言葉でもあります。

本日の朗読として指定されているシラ書の箇所は、「まさしくその通り」としか言い様がない示唆に富んだ言葉の羅列であります。「人間も話をすると欠点が現れてくるものだ」と記され、また「心の思いは話を聞けば分かる」と記されています。わたしたちが語る言葉は、わたしたちの心の反映です。心の鏡です。今こうして言葉を語っている自分自身への自戒も込めてであります。心にもないことを語ることで自分をより良く見せようとしても、語る言葉がその野望を打ち砕きます。

ルカ福音はそのことを、イエスの言葉として、「人の口は、心からあふれ出ることを語るものである」と記しています。それはすなわち「木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる」という言葉に集約されます。わたしたちはどのような実を結んでいるのでしょうか。

同時にルカ福音は、「兄弟の目にあるおがくずは見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」と語るイエスの言葉を記します。どれほどわたしたちは、自らの身を振り返ることなく、他者を裁いていることでしょうか。他者を裁き断罪するとき、わたしたちは時に大きな思い違いをしてはいないでしょうか。自分も同じように、過ちを犯す人間である。弱さを抱えた人間であるということを、忘れてはいないでしょうか。

コリントの教会への手紙でパウロは、「死よお前の勝利はどこにあるのか」と記しています。死は人間のいのちを奪い、すべてを無に帰することによって、あたかもわたしたちを完全に支配しているかのようであり、それによってわたしたちの上に勝利する存在であるかのように思われます。わたしたちは死によって、すべてを失うからであります。

しかしパウロは、死はすべての終わりではなく、死に打ち勝って復活した主イエスによって、わたしたちは死による見せかけの勝利を打ち砕き、新しいいのちに生きるという本当の勝利に与るのだと指摘します。人間の存在を無に帰する死という究極の出来事を、主の復活は打ち砕いてしまったのですから、それにあずかる者には恐れるものはありません。パウロは「主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを」わたしたち知っている」と記します。

主に結ばれた苦勞に身を委ねないときに、わたしたちは他者を裁きます。主に結ばれた苦勞に身を委ねないときに、わたしたちはむなしく虚榮に満ちた言葉を語ります。わたしたちは、主に結ばれて福音に生き、その福音を忠実に語り、その福音が現実化するよう努めなくてはなりません。福音は心に秘めておくものではなく、わたしたちの日々の生活を通じて、つまりわたしたちの語る言葉と行いを通じて証しするものです。

特に、感染症の状況が続く中で、さまざまな活動の自粛が続き、勢いわたしたちはインターネットを通じたコミュニケーションに比重を大きく移しています。インターネットにおける無責任な発言や、他人を裁く言動、また面白おかしくするためなのか、全く真実ではないことを広めようとする言説。時に他者の命を奪うほどの負の力を秘めた言葉の暴力。言葉の後ろに控える人間の心の鏡です。だからこそ、「教会は現代世界の血管に、福音の永遠の力、世界を生かす神の力を送りこまなければ」なりません。（ヨハネ 23 世「フマーネ・サルーティス」）